説教要旨『何者として歩むか』

エフェソの信徒への手紙　５章６～２０節

３年前、朝井リョウさんの小説『何者』が戦後最年少での直木賞となり、話題を呼びました。小説では、就職活動に臨む大学生達の内面が絶妙に描き出されています。学生達は、面接試験の合否をめぐって、自分の存在価値がぐらつき始めるのを感じます。そうしたなか、自分は他の人にはない特別な「何者か」でありたいと願い、さりげなく相手の生き方や考え方を批判することで、自分の存在価値を必死に守ろうとする姿があぶり出されていきます。そんな紆余曲折を経て、ある事に気づいた一人の女子学生の言葉が印象に残りました。「自分は自分にしかなれないんだよ。だって、留学したって、インターンしたって、ボランティアしたって…憧れの、理想の誰にもなれなかった。貧しい国のこどもと触れ合ったり、知らない土地に学校を建てたりした手でそのまま、人の内定先をインターネットで検索して、それがブラック会社って噂されているような所だったら、ちょっと慰められたりしてる。今でも、ダサくて、カッコ悪くて、醜い自分のまま」。学生達は、就職活動を通して、自分が「何者か」である前に、抗うのことのできない弱さを併せ持った一人の人間であることを痛感していきます。

本日の聖書箇所には「光の子として歩みなさい」とあります。例えばそれは、「愛によって歩むこと」（2 節）であり、「何が主に喜ばれるかを吟味し」（10 節）、「主の御心が何であるかを悟り」（17 節）ながら歩むことを意味しています。ただし、そのような歩みの前提として、「以前には暗闇」だった私を意識させようとしています。「この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きて」（2:12）いた私、「肉や心の欲するままに行動し」（2:3）、「情欲に迷わされ、滅びに向かってい」（4:22）た私、「風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されたり」（4:14）していた私、あるいは「口にするのも恥ずかしいこと」（11 節）に加わっていた私の姿でもあるでしょう。そんな私が、神の愛によって生きることを赦されている、いやむしろ、その神に結ばれて、世の闇を照らす光の子として輝くことを望まれ、世に遣わされている…その神の「愛に根ざ」（4:15）し、「主に向かって心からほめ歌い…感謝」することを忘れないようにと強調します。そのようにして神に結ばれた光こそ、かつて神が私達にそうされたように、闇を光に変えていくような（14 節）愛の光となることが示されます。

あなたは「何者」か、どんな存在価値を持った者として歩むのか。そのような問いに対して、聖書は答えを持っています。「主に結ばれて、光の子として歩みなさい」。

（文責：望月達朗牧師）